

1997年(平成9年)7月5日(土曜日)

下町風情漂う街で、江戸の文字を守り続けている気鋭の書き手がいる。橋右橋さん(68)がその人。下谷生まれ。子供のころから親しんだ下谷神社の千社札、寄席の鈴本……。肌になじんだ江戸っ子気質が自ずとこ

(東京・日暮里)

芸記 伝統風土

の道を選んでいた。落語が好きで十八歳で橋右近に師事。

「師匠の薫陶あって落語だけではなく、江戸のものすべてが好きになった」

以来、寄席や歌舞伎文字の勘亭流など、江戸の文字すべてをものにしようと精

江戸のものすべてが好き

進してきた。橋さんが文字二人、刷り師三人が健在。を書き、その文字を彫り師 芸が豊かな下町らしい。が墨のりがよいといわれ 江戸に始まる千社札交換の桜木の版木に彫り込み、(会(現存最古)の「東都納札



橋流寄席文字 橋右橋



員四百二十人、うち橋連は四十六人。この日は自作の札の中でも、これぞという傑作を出品して交換する。

会費を出し合っている共同

制作による連札もあり、鹿(とび)などの仕事師やだんな染も姿を見せて活況の座になる。右橋さんはこの五年間参加者の題名(屋号や名字)を書き添えてきた。

「立ち」といって、会ではその千社札を四国三十三カ所、坂東三十三カ所、秩父三十四カ所の札所にはって巡る。

「百カ所巡れば一応『満願』、先はまだまだ長い」

江戸文字の流行で本物の姿が見えにくくなっている

ことを心配しながらも「先輩が形作ってきた伝統に支えられた本物を残してい

きたい」と思いは熱い。助享流は家元の指導を受け、

次は刷り師の手へ。「色彩 味」写真が年に四回、上は刷り師と相談しながら最野・御徒町の摩利支天で開後の仕上げをします」

荒川区には現在、彫り師の故人をしのぶ追善会。会名取名は荒井三輝。